

「脳卒中」

監修・写真提供
高木 誠 東京都済生会中央病院副院長

要介護の原因トップ、脳卒中 高血圧・糖尿病・高脂血症・たばこの危険因子を遠ざけよう

脳血管のトラブルが 脳にダメージを与える「脳卒中」

脳卒中とは、脳の血管に生じた何らかのトラブルによって脳が障害される病気の総称で、大きく分けて「出血性脳卒中」と「虚血性脳卒中」の2つのタイプに分類することができます。

出血性脳卒中は、脳血管が破れて出血したために脳の機能が障害されるタイプの脳卒中です。出血部に血腫という塊ができ、これが周りを圧迫して二次的に脳組織の破壊が進みます。

出血性脳卒中は、出血した場所によって「脳出血」や「くも膜下出血」というように呼ばれます（図1参照）。

一方の虚血性脳卒中は、脳への血流が不十分になってしまいうタイプの脳卒中で、その代表が「脳梗塞」です。脳梗塞は、脳血管が詰まり、そこから先の血流が途絶えるために脳細胞が死んでしまい、脳の機能が障害される病気です。

脳梗塞は、血管を詰まらせる原因によって、大きく「脳血栓」と「脳塞栓」の2つのタイプに分類されます。

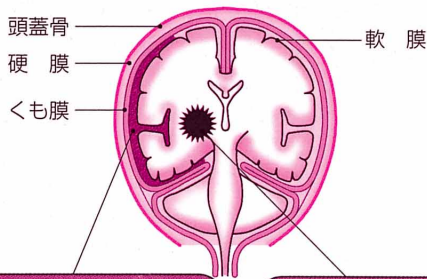
かつては脳出血が圧倒的に多かったのですが、近年では減少し、代わりに脳梗塞が増加して脳卒中全体の約7割（その約3分の2は脳血栓）を占めています。

〔図1〕 脳卒中のタイプ



出血性脳卒中

脳血管が破れ、出血

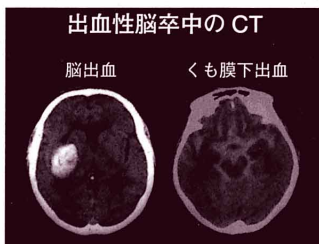


くも膜下出血

くも膜と軟膜の間にある細い血管から出血

脳出血

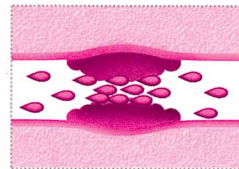
脳組織（俗にいう脳みそ）の中にある血管から出血



出血性脳卒中の CT

脳出血 くも膜下出血

◀脳出血のCTでは、左の白い塊の部分で出血している。くも膜下出血のCTでは、くも膜の下に出血した血液が脳表面や溝の中に広がり、白くもやがかかったように見える。



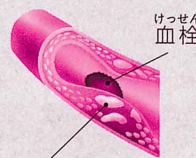
虚血性脳卒中

脳血管が詰まるなどして脳組織への血流が不足

脳梗塞

脳血栓

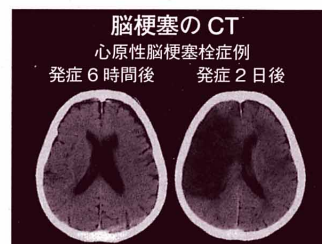
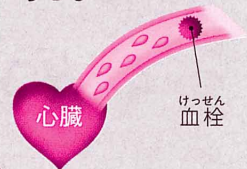
脳血管にできた血栓が血管を詰まらせる



動脈硬化により厚く、硬くなった血管壁

脳塞栓

心臓でできた血栓が血流によって脳血管にたどり着き、詰まらせる

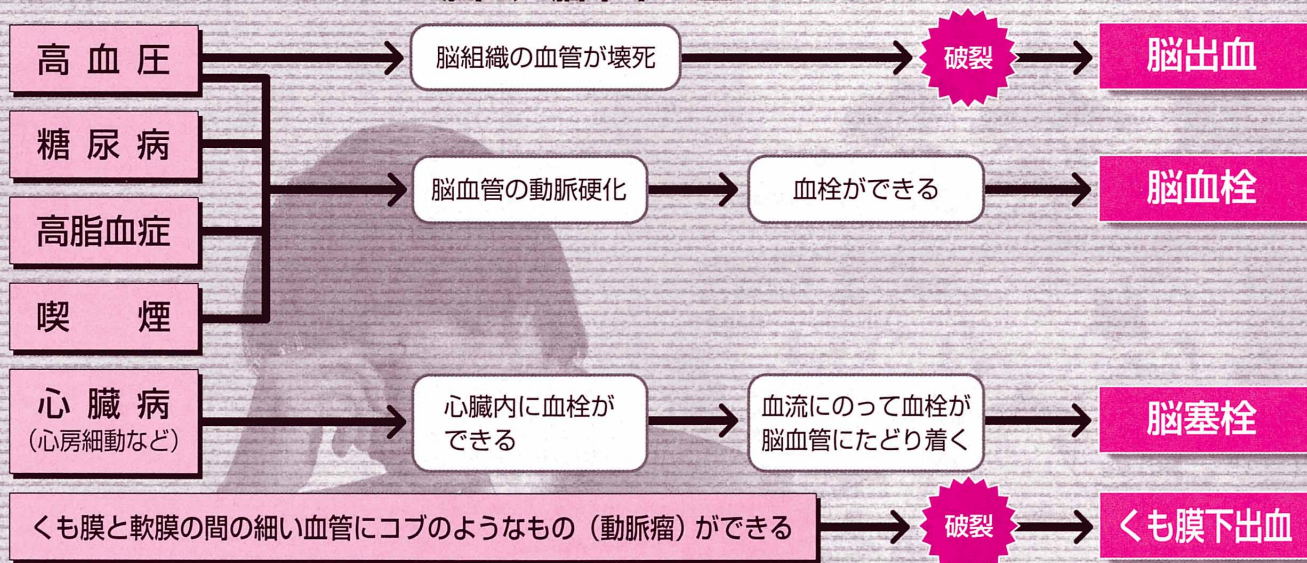


脳梗塞の CT

心原性脳梗塞栓症例
発症 6 時間後 発症 2 日後

◀脳梗塞のCT像。黒い部分が梗塞を起こしている。

〔図2〕 脳卒中に至るプロセス



おもな脳卒中の
初期症状

- ① 左右いずれかの半身に力が入らない
 - ② ろれつが回らない
 - ③ 視野の半分が見えない
 - ④ 言葉が理解できない、あるいは言いたいことが言えない
 - ⑤ 左右いずれかの半身がしびれる
 - ⑥ めまい、ふらつき
 - ⑦ 吐き気を伴う激しい頭痛
- …など

「突然意識を失って倒れる」のはごく一部のケースで、ほとんどは左記のような症状（最も多く見られるのは①の症状）から始まります。

● 介護が必要になった原因トップ3

順位	原因	要介護者の総数に占める割合 (%)
1	脳血管疾患 (脳卒中など)	27.7
2	高齢による衰弱	16.1
3	痴呆	10.7

(平成13年国民生活基礎調査より)

脳卒中は、ある日突然意識を失ったり、左右いずれかの半身がマヒするなどの症状が現れます。そのため、多くの人は脳卒中に対して「突然見舞われた不幸」というイメージを抱いているかもしれません。しかし、実際には、その下地となるいくつかの危険因子があり、それが長年続いた末に脳卒中を発症します(図2参照)。つまり、長い準備期間を経て発症するのが脳卒中なのです。医学の進歩により、早期に適切な治療を受ければ脳卒中で命を落とすケースは少なくなりましたが、運動機能や言語機能に障害が残り、その後遺症に悩む人は少なくありません。

脳卒中は長年の
準備期間を経て発症

コラム

脳卒中を防ぐために

温度差、水分補給、便秘にも気をつけよう

脳卒中を防ぐには、①塩分のとりすぎを防ぐ、②過食を防ぐ、③適度な運動、④禁煙、⑤ストレスをため込まない、⑥規則正しい生活を送り、過労を防ぐ——などの心がけが基本です。

これらに加え、季節ごとに注意事項があります。冬場は急激な温度差に要注意です。暖房のきいた部屋から寒い浴室に移動した

り、外出するとき、血管が収縮して急に血圧が上昇し、脳卒中が起こることもあります。夏場には積極的に水分を補給することが大切です。夏場に汗をかいたり、下痢をするなどして脱水状態になると、血液の濃度が高くなり、血栓ができやすくなります。

また、便秘にも注意したいものです。便秘があるために排便時にいきむと急激に血圧が上昇し、脳卒中が起こることもあります。

ん。このような事態を未然に防ぐには、今から生活習慣の改善を心がけ、脳卒中の危険因子を防ぐことが大切です。